がん教育を「いのち」学ぶ場に

特定非営利活動法人いのちをバトンタッチする会代表
鈴木中人

いのちの授業

私は、長女・景子（小学校１年生）を小児がんで亡くしました（写真１）。今、その体験をもとに全国の学校などで「いのちの授業」に取組んでいます。６歳の「いのち」を精一杯輝かせた“小児がんの少女と家族の姿”を有りのままに語り、いのちをみつめるものです。

入院前夜、私が「どうか病気が治りますように」と祈ったこと。景子は、車いすの生活になっても「学校に行きたい、先生やお友だちに会いたい」と学校に行ったこと。看護師さんの結婚式で「私も早くお嫁さんになりたい」と嬉しそうに夢を語ったこと。妻は、天国に旅立った景子を抱いて「体が冷たい。風邪をひくといけないからタオルケットをかけて」と涙を流したこと。純白なウエディングドレスを着せて、大好きだったお嫁さんにして家から出棺したこと。約３年間闘病して、小さな白い箱になって帰ってきたこと…。

そして、最後にある思いを伝えます。

「どんなことがあっても、お父さんお母さんより、絶対、早く死んではいけない！　それが、いのちを大切にする、家族の絆の原点です。みんなで、いのちを輝かせてください」

写真１　闘病中の景子と家族

授業の中では、「がんは身近な病気」「子どもにも『がん』がある」「小児がんは不治の病気ではない」「周りの人の正しい理解やサポートが大切」なことも伝えています。

児童生徒は素直な感想を届けてくれます。「普通に学校に来られることが幸せなんだ」「生きたくても生きられない人がいる、今を大切にしたい」「小児がんのことを初めて知った。病気の仲間を支えてあげたい」…。

いのちの授業には25万人が参加。今年、小学校・道徳の教科書にもなりました。

いのちの教育は、一人一人の子どもの心に届く授業をすること。答えを急がず、詰め込まず、いのちの体験と思いを重ねて「心を育む」大切さを実感しています。

がん教育で大切にしたいこと

いのちの授業を始めた当時（2005年）、学校現場にうかがい、不思議に感じたことがありました。「なぜ、がん・小児がんについて学校では教えていないのか？」です。その理由は、

①がん＝死をタブー視する
②がんを教えるノウハウがない
③必須の学習ではないから

というものでした。しかしその後、2012年に政府が策定したがん対策推進基本計画（厚生労働省）に基づいて、学校でがん教育推進が決定。文科省でも検討会を設置。現在、がんの正しい理解といのちの大切さを学ぶ必須学習として、全国の学校でがん教育が本格化しています。がんが国民病となる中、がん教育をより深く広く根付かせていくことが一層求められています。

がん教育の課題や大切にしたいことについて、「いのちの授業」の実践者、小児がんの支援者、がん遺族の視点から次のことを感じています。

○大人のがん・医学知識が中心になりがち

がん教育の内容は全国的にほぼ同じです。がん対策（予防・検診率向上等）をルーツとして、推薦教材を基本に、まずは土台作りとして必要な知識を教えることは重要です。ただ、大人のがんばかりでは、児童生徒は少し遠い世界のことに感じてしまう面もあるのではないでしょうか。

○小児がんに向き合う、教える

子どもの病死原因の第１位は小児がんです。約2500人が毎年新たに発症していますが、そのうち70～80％は治る病気になっており、闘病しながら学校に復学する子どももいます。学校に戻ることが生きる力になっているのです。

学校現場において、小児がんが正しく理解されることは現実の大きな課題です。また、心に届く授業づくりの原点は「もし自分なら、もし同級生ならどうするか」と児童生徒自身が当事者としてリアルに考えることが重要です。がん教育のど真ん中に、小児がんを位置付けてほしいと願います。

○意志を込めて「いのち」を教える

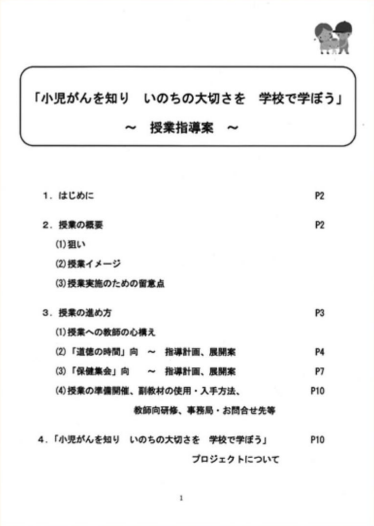
がん教育を実施すれば、いのちの教育になるのではありません。いのちを考えるプログラムを準備して、思いを伝えてこそ心に届くのです。特に小学生には、がん教育と構えることよりも、いのちの教育とともに考えることのほうが受け入れやすく、心に届くようにも感じます。

○がん当事者の気持ちに寄り添う

私は「いのちの授業」をするにあたり、小児がんの児童生徒が在校する場合は、ご家族のご意向を事前に確認してもらっています。小児がん専門病院で10歳以上の子どもには病名がほぼ告知されている現在、90％以上は授業実施に了解いただいています。もちろん延期や中止をすることもあります。その一つひとつが、がん教育の学びにもなるのです。配慮とは過敏に構えることではなく、当事者の気持ちを第一に寄り添うことです。

○現場の教師が主体となって教える

専門家や体験者等、外部講師の活用は大切です。しかし、一方で特定の外部講師が担うものとすると、特定の授業になってしまいがちです。いのちや心の教育は、日常の教室において教師と児童生徒の関係性の中で着実に育つものです。外部講師の授業前後には事前



「小児がんを知り　いのちの大切さを　学校で学ぼう」
～　授業指導案　～

1．はじめに　P2
2．授業の概要　P2
(1)狙い
(2)授業イメージ
(3)授業実施のための留意点
3．授業の進め方　P3
(1)授業への教師の心構え
(2)「道徳の時間」向　～　指導計画、展開案　P4
(3)「保健集会」向　～　指導計画、展開案　P7
(4)授業の準備開催、副教材の使用・入手方法、教師向研修、事務局・お問合せ先等　P10
4．「小児がんを知り　いのちの大切さを　学校で学ぼう」プロジェクトについて　P10

資料１　副教材（授業指導案）

資料２　副教材（ワークシート冊子）

資料３　副教材（授業事例 DVD）

写真２　小学校でのいのちの授業

写真３　中学校でのいのちの授業

写真４　中学校での授業事例（保健集会）

勉強や振り返りを設けるなど、教師が主体となって進めてほしいものです。

○目指す姿＝志を持つ

がん教育は、10 年、20 年と取り組むテーマです。その取り組みは、①土台をつくる→②課題やニーズを見据えて深化＆進化させる→③日本の「健康・いのち」の中核教育とするものです。土台を整えた後は、遠くを見据えながら、今できることを多様な視点＆オープンな発想で一歩一歩進めましょう。

「いのち」学ぶ場にするための実践

現在、「小児がんを知り、いのちの大切さを学校で学ぼう」プロジェクトを進めています。いのちの授業とがん教育を融合させたものです。小児がんを発病した２人の少女の実話（生と死）を通じて、がん・小児がんを学び、いのちの大切さを語り合い、考えます。

現場の教師が保健集会・道徳・総合学習などで実践できるように、副教材を制作しました（資料１～３）。

●授業指導案：Ａ４×12 ページ
●ワークシート冊子：Ｂ５×16 ページ
●授業事例ＤＶＤ：３名の教師事例

約 200 の学校や教職員研修で約２万部が活用されており、「実践的で使いやすい」「生徒の心に届く感動的な教材」とのお声をいただいています。副教材の制作にあたっては教師・医師・いのちの授業の実践者などが編集メンバーとなり、学校での試行授業も行い仕上げました。がん教育の授業づくりや副教材づくりにおいても、外部パワーを大いに活用してほしいと思います。

副教材は、いのちをバトンタッチする会の公式サイト（http://www.hm7.aitai.ne.jp/~inochi-b/）から無料でダウンロードできます。また、がん教育の講演や研修（写真２～４）も行っていますので、ご活用いただければ幸いです。

がんを通じて“いのち・生きる”を育む

ある小児がんの専門医が、こう話してくれました。

「小学生の子どもが入院してきました。病気のことを話そうとすると、その子が言いました。『私、景子ちゃんのお話を聞いたことがあるから』。お母さんも『私も一緒でした』と。鈴木さんの「いのちの授業」を学校で聴いたとのことでした。

景子ちゃんは亡くなったので、どう感じているか少し心配になりました。すると、『私も、景子ちゃんのようにがんばるから』と言ってくれました」

胸が熱くなりました…。同級生も先生も、この子をきっと支えてくれると思います。

子どもたちは、人生 100 年の時代を生きていきます。がんを通じて“いのち・生きる”を育む授業が広がることを切に願います。

すずき・なかと
いのちをバトンタッチする会代表。長女の小児がん発病・死別を機に「いのちの授業」に取り組む。授業には 25 万人が参加。厚生労働省がん対策推進協議会委員、三重大学医学部非常勤講師、がんの子どもを守る会評議員なども務める。公式サイト「いのちの授業　鈴木中人」で検索。